

## マンハッタン号来航

弘化二年三月十一日（一八四五年四月十八日）夕刻、アメリカの捕鯨船マンハッタン号が三百隻あまりの漁船に曳航されて、浦賀湊へ入ってきた。

マンハッタン号には、鳥島で救助された阿波国撫養（むや）の天野屋兵右衛門持ち船の幸宝丸の乗組員十一人と鳥島沖で破船して漂流中であつた下総国銚子の幸太郎持ち船の千寿丸の乗組員十一人が乗っていた。

マンハッタン号の来航目的は、この漂流民を日本へ送還させるためであつた。しかし、マンハッタン号のクーパー船長は八年前の「モリソン号」事件での日本側の対応を知っていたので、簡単には入港できないであろうことは予測していた。

房総半島が見えてくると日本側の水主たちもここで下ろしてくれるように懇願した。しかし、二十二名もの漂流民を救助したマンハッタン号にも水と食料が乏しくなっている現状があり、漂流民と交換にこの不足している

物資を供給してほしいとの考えもあつた。

クーパー船長は二隻の船の代表を下ろして、船の中の現状を浦賀奉行所へ訴えさせ、尚かつ安全に漂流民を引き渡せる計画にでた。その役目を果たすため幸宝丸の水主・由蔵と千寿丸の水主・太郎兵衛を小船に乗せ上陸させた。二人が上陸した所は上総国守谷村（現・千葉県勝浦市）であつた。

マンハッタン号はそのまま順風を受けて南下を続けたので、両船頭はこのまま二人の使者が浦賀へ到着する前に江戸湾へマンハッタン号が入るのではないかとあわて、もう一組の使者を上陸させることを提案した。今度は幸宝丸の幸助と千寿丸の留蔵が送り出され、安房国朝夷村（現・南房総市）へ上陸した。

クーパー船長はこれらの行動がうまくいくことを強く望んでいたが、それとともに日本人の持っていた地図の正確さに驚いていた。

最初に上陸した由蔵は守谷村の名主に付き添われて、十三里の山道を超え、三里の海を渡って浦賀へ到着した。同じころ異国船発見の連絡が房総半島から浦賀へ寄せられてきた。

太郎兵衛はこの地の領主・清水氏の江戸の屋敷に向かっていた。

こうして浦賀と江戸で詳しい取り調べが行われ、国名はわからないが捕鯨船であること、救助されてからの待遇がよかったこと、武器らしいものはほとんど積んでいないことなどがわかってきた。

その一方で浦賀奉行所と江戸湾警備の任についていた川越藩は異国船搜索ために船を出した。しかし、この搜索ではマンハッタン号を発見できなかった。それもそのはずマンハッタン号は八丈島付近まで南下していた。

マンハッタン号が再び姿を現したのは、二十日あまり経った三月十日のことであった。すぐにでも江戸へ向かいたかったクーパー船長の思いは聞き入れられず、館山の港へ入れられ、翌日浦賀へ向かった。

マンハッタン号が姿を見せてから二十日以上かかったことが、幕府にとっては評議する時間ができたことで、適切な対応ができていた。

それは浦賀奉行の土岐頼旨が、クーパー船長が漂流民に対する寛大な対応してくれたことに感謝し、すべての漂流民を特例として浦賀へ上げること許可した。またマ

ンハッタン号には希望していた水や食料が積みこまれた。  
(了)